

# 資源の限定観と主観的幸福感の関連性

The relationship between sense of limited resources and subjective well-being

村上幸史

Koshi Murakami

## Abstract

「他者が成功すれば、代わりに自分は失敗する」かのように、あたかも対人間で成功に結びつく資源の量には限界があり、その資源を奪い合っているように語られることがある。このような考え方は資源の限定観と呼ぶことができる。

本研究では、広く資源の限定観についての調査を行い、幸福感の判断との関連性を検討した。その結果、対人間での資源の限定観（「対人的定量感」）は個人単位での定量観とは概念的に区別されることや、他者との相対的な比較が主観的幸福感を低下させていることが明らかになった。とりわけ現状が満たされていない原因を「対人的定量感」に求めていると考えれば、不幸な者ほど相対的判断をしやすという相対的剥奪理論と同様の構造になっていると考えられる。

キーワード：しろうと信念、資源の限定観、主観的幸福感

## 問題

### 資源の限定観とは

日常生活の中では、その真偽に限らず、あたかも量に限界がある資源のように取り扱われている事柄がある。この資源の限定観とも呼べる言説には、「減る」や「奪う」、「定量である」などの形で表現され、「個人が成功や幸福を得るための資源には何らかの形で限りがある」という特徴が見られる。

例えば、ほおじろは著書の中で、「エナジーバンパイア」という例を取り上げている。このバンパイアは特定の他者であり、接触によって個人のエネルギーを奪い取るため、幸福を阻害する存在として描かれている<sup>1)</sup>。この意味でのエネルギーは有限であるという限定観を示している。また、世の中における仕事は、決まった一定量しかないという考え方があることも知られている。これらの意味での他者もまた、自分の成功をある種阻害する存在のように描かれている。

とりわけ幸福や幸運に関しては、「社会全体の幸福絶対量って、一定ですか」<sup>2)</sup> や「周りに人の運を奪う人いませんか？」<sup>3)</sup> のような言説がネット上などでしばしば語られており、対人間関係上での資源の限定観は意識されやすいのではないかと考えられる。また隣国である韓国でも、このような対人間での幸福に関する限定観があることが指摘されており<sup>4)</sup>、資源の限定観は日本に限らない傾向なのかもしれない。

このような科学的な検証を経ていない、あるいは否定されているが一般に信じられている言説はしろうと信念 (lay belief) やしろうと理論 (lay theory) と呼ばれている。先の仕事に関する限定観

は、経済学的には誤りとして否定されており、労働塊の「誤謬」(lump of labor fallacy)と呼ばれている(例えば Krugman<sup>5)</sup>)。

資源の限定観には、対人関係を中心とした特定の社会での限定性を唱える説と、個人単位で限りがあるとする説に分けることができる。村上<sup>6)</sup> 7) は、個人内での「運」に関する限定説に注目し、その「運資源ビリーフ」の特徴を示している。特定の社会での限定説は、個人内での限定説と関連するものなのだろうか。また「運資源ビリーフ」と同様に、判断の過程に何らかの影響を持つものだろうか。

## 本研究の目的

近年、主観的幸福感に関する議論が進んでいる。幸福感に関連する要因は、収入<sup>8)</sup> や対人関係<sup>9)</sup> など、様々な要因が挙げられているが、本研究では、他者との比較による相対的な幸福感と資源の限定観の関連性に着目した。俗に「人の不幸は蜜の味」とも言われ、相対的剥奪理論が示すように、主観的な幸福感の判断には相対的な比較の影響力が大きいと考えられる。

本研究では、「世界や自分の周りでその量が決まっている」という特定の社会内での限定性(以下「対人的定量感」と呼ぶ)の信念が、競争意識を招き、その結果として幸福感の判断に影響するとの仮説を立てて、これを検討した。これは「対人的定量感」がいわばゼロサムゲーム的な構造を意識させることを意味している。

まず特定の社会における資源の限定観の中でも、特に実資源ではない言説に注目し、様々な事象に対して、探索的な調査を行った。同時に個人内での限定観との比較を行った(研究1)。次に、この結果をふまえて、「対人的定量感」と幸福感の判断に関する仮説を検討するための調査を行った。同時に幸福感の判断基準について、幸福と不幸の非対称性と、それぞれの実感の有無に関しても同時に検討を行い、相対的な幸福感の構造についても検討を行った(研究2)。

## 研究1

### 方法

本やwebから、資源の限定観に該当するものとして、「～は定量である」、「～を奪う(奪われる)」、「～を奪い合う」、「～の量は決まっている」に類する表現が用いられている文章を抽出した。抽出した104項目の中から、類似した項目をまとめ、さらに石油や領土など実資源に該当すると考えられるものを除き、40項目を選出した。

続いて質問紙調査を行った。回答者は大学生83名(男性28名、女性54名、不明1名、平均年齢:22.2歳)である。以下の5つの質問それぞれについて、上の40項目から該当するものを全て選択してもらった。

- A) 世界やあなたの周りで一定の量が決まっており、取り合いになることがあると思うもの(対人的定量感)
- B) 他者から奪ったり、奪われたりする感じがするもの(対人的剥奪感)
- C) 他者に何らかの方法で与えたり、渡すことができると思うもの(対人的譲渡感)
- D) 一時的(一日や一年を含む)にであれ、個人が持っている量には限りがある(あるいは、使えば減るような気がする)もの(個人内減少感)
- E) 一時的ではなく、一生のうちで個人が持っている量が決まっており、使えば減るような気が

するもの（個人内定量感）

また項目として挙げたもの以外に、各質問に該当すると思う項目があれば欄外に記入してもらった。他に幸福観に関する項目も測定したが、ここでは割愛する。

Table1 各資源の限定観に関する回答割合

	対人的定量感	対人的剥奪感	対人的譲渡感	個人内減少感	個人内定量感
幸福（幸せの量）	* 33.7%	44.6%	72.3%	32.5%	32.5%
エネルギー	61.4%	44.6%	62.7%	62.7%	28.9%
チャンス	53.0%	63.9%	63.9%	45.8%	34.9%
運	27.7%	27.7%	10.8%	72.3%	51.8%
もてること	* 34.9%	28.9%	4.8%	27.7%	19.3%
魂	9.6%	10.8%	2.4%	15.7%	24.1%
生气・気	7.2%	27.7%	27.7%	31.3%	20.5%
不幸	8.4%	10.8%	41.0%	21.7%	20.5%
パワー	20.5%	33.7%	* 59.0%	48.2%	24.1%
流れ・勢い	18.1%	37.3%	31.3%	18.1%	15.7%
元気	14.5%	50.6%	85.5%	* 38.6%	18.1%
勇気	7.2%	16.9%	73.5%	14.5%	3.6%
人脈	25.3%	20.5%	43.4%	19.3%	3.6%
地位	80.7%	54.2%	33.7%	21.7%	14.5%
領域	30.1%	24.1%	10.8%	14.5%	3.6%
優位さ	31.3%	34.9%	14.5%	13.3%	2.4%
人気	* 44.6%	* 54.2%	15.7%	28.9%	8.4%
空気（よい雰囲気）	15.7%	* 22.9%	42.2%	7.2%	0.0%
勢力	26.5%	34.9%	4.8%	25.3%	12.0%
仕事の量	47.0%	34.9%	25.3%	26.5%	16.9%
生命力	13.3%	27.7%	25.3%	* 37.3%	44.6%
善意・優しさ	9.6%	8.4%	60.2%	8.4%	2.4%
熱く・夢中になる	9.6%	12.0%	20.5%	9.6%	9.6%
アイデア	25.3%	39.8%	48.2%	22.9%	8.4%
想像力	15.7%	14.5%	18.1%	14.5%	3.6%
喜びや快感	13.3%	* 25.3%	69.9%	* 13.3%	2.4%
愛情	21.7%	31.3%	84.3%	7.2%	1.2%
センス	18.1%	10.8%	6.0%	0.0%	2.4%
才能	30.1%	13.3%	4.8%	12.0%	12.0%
縁・出会い	33.7%	25.3%	50.6%	20.5%	15.7%
健康	14.5%	27.7%	18.1%	26.5%	25.3%
やる気	8.4%	55.4%	69.9%	42.2%	8.4%
好奇心	7.2%	4.8%	25.3%	4.8%	3.6%
涙の量	6.0%	7.2%	10.8%	22.9%	12.0%
精力の量	4.8%	2.4%	2.4%	30.1%	* 20.5%
魔力	10.8%	7.2%	* 6.0%	14.5%	7.2%
輝きを放つ	12.0%	10.8%	* 14.5%	14.5%	10.8%
こころ	9.6%	21.7%	15.7%	4.8%	* 6.0%
厄	7.2%	3.6%	9.6%	14.5%	12.0%
たたり	4.8%	2.4%	4.8%	4.8%	6.0%
平均	21.8%	25.8%	32.3%	22.8%	14.2%

注) アスタリスクは性差があることを示す。斜体は女性の方が高く、その他は男性の方が高い。

Table2 各限定観間の相関係数

	対人的剥奪感	対人的譲渡感	個人内減少感	個人内定量感
対人的定量感	.65	.14	.39	.24
対人的剥奪感		.55	.55	.38
対人的譲渡感			.18	-.04
個人内減少感				.82

## 結果

各質問に関して、肯定的な回答を得た割合を Table1 に示した。「対人的定量感」を示す項目では「地位」、「エネルギー」、「チャンス」、「対人的剥奪感」では、先の項目に加えて「元気」と「やる気」が、「対人的譲渡感」では「元気」、「勇気」、「幸福」、「個人内減少感」では「運」、「エネルギー」、「やる気」、「個人内定量感」では「運」、「生命力」、「チャンス」が肯定的に回答された割合が高かった。

これらに対人間での限定観を示す項目（AとB）、個人内での限定観を示す項目（DとE）に分けて、どちらかの割合が30%以上か、両方が20%未満、その中間に位置するかによって分類を行った。

その結果、「幸福」、「エネルギー」、「チャンス」の3項目については対人間・個人内共に高かった。これに対して、「元気」、「精力の量」、「生命力」、「生気・気」の4項目は個人内のみ高く、逆に「才能」、「領域」、「優位さ」の3項目は対人間でのみ高かった。各項目に関する二次的相関は Table2 に示した。「対人的定量感」は「対人的剥奪感」と関連が高く、「個人内定量感」とも中程度の相関が見られた。「個人内減少感」と「個人内定量感」の相関は非常に高かった。

A)の対人的定量感を示す項目については、Ward法によるクラスター分析を行った結果、5クラスターが得られた。第1クラスターは「幸福」や「運」、「センス」、「才能」、「流れ・勢い」、「人脈」、「縁・出会い」、「空気」、「アイデア」、「想像力」、「愛情」の11項目、第2クラスターは「エネルギー」や「チャンス」、「地位」、「仕事の量」の4項目、第3クラスターは「人気」や「勢力」、「優位さ」、「領域」、「もてること」の5項目、第4クラスターは「パワー」や「生命力」、「元気」、「健康」、「生気・気」、「精力の量」、「こころ」、「魔力」、「魂」、「涙の量」の13項目で、「不幸」や「厄」や「たたり」などのネガティブなものはここに含まれた。第5クラスターは主としてポジティブ感情やそれに関わる「善意・優しさ」や「勇気」、「熱く・夢中になる」、「好奇心」、「喜び・快感」、「やる気」、「輝きを放つ」の7項目が含まれた。

## 考察

以上の調査結果から明らかになったのは、成功そのものに関わる包括的な要因と、行動を直接左右する要因の区分である。前者は対人間・個人内の両者にまたがる傾向が見られたのに対して、後者の生命力や領域などでは個人内、対人間それぞれで異なる傾向が見られている。また剥奪感と定量感に分けて見ると、やる気やパワー、元気、流れなど剥奪感は行動を直接左右する要因と考えられるのに対して、定量感は幸福やチャンスなど成功そのものに関わる包括的な要因であると考えられる。各概念は異なった言葉で示された場合に、その印象も異なる可能性もあるが、一定の差異が見られたと言えるだろう。

また個人内と対人間の資源の限定観は、一定程度の相関関係が見られるものの、一方を持てば、

他方を持ち合わせるという性質のものではなく、概念的に区別されるものであることも示された。

## 研究2

### 方法

**回答者** 20代から60代までの500名(男女各250名)。インターネット上で行い、調査会社に委託した。回答者は、男女世代別の収入を元に、それぞれ高中低の3群に割り当てた。

### 回答項目

1. 資源の限定観に関する項目 資源の限定観を測定する項目として、研究1の結果を元にして、21項目(幸福、活動のエネルギー、チャンス、勢力、異性にもてること、やる気、生气・気、人気、魔力、流れ・勢い、生命力、善意や優しさ、人脈、熱くなる・夢中になれること、得意な分野(領域)、喜びや快感、愛情、センス・才能、縁・出会い、アイデア、運)を選択した。これらについて「対人的定量感(世界、自分の周り)」「対人的剥奪感」「個人内減少感」「個人内定量感」の5分野それぞれに該当するものを全て選択してもらった。
2. 主観的幸福感尺度(Subjective Happiness Scale) Lyubomirsky & Lepper<sup>10)</sup>の作成した項目を翻訳した、島井ら<sup>11)</sup>の項目(4項目)を用いた。
3. 全般的な生活満足度尺度(Satisfaction with Life Scale) Dienerら<sup>12)</sup>の項目を、大石<sup>13)</sup>が翻訳したものを用いた。
4. 幸福や不幸に関する価値観 総合的判断と区別した幸福感や不幸感に関する実感の有無と、判断基準としての他者意識や時間の影響を測定する項目(37項目)を作成し、7段階で測定した。
5. 運に関する態度尺度 「運は使うと減ってしまうもののような気がする」「運の強さには個人差があると思う」などの運に関する信念を測定する項目(16項目)を7段階で測定した。
6. JWB完成版尺度 公平世界観(公正世界信念: Just World Belief)は因果応報に関する信念を測定する項目<sup>14)</sup>を用いた。「因果の公平性」に関する信念と、「現状の不公正感」を測定する項目からなる。
7. 達成動機尺度 他者との比較に関連して、堀野<sup>15)</sup>の達成動機尺度のうち、「競争的達成動機」を測定する項目を用いた。
8. フェイス項目(収入、居住地、年齢、職業、婚姻歴)

### 結果

**「対人的定量感」項目の分類** 資源の限定観のうち、「対人的定量感(世界、自分の周り)」の項目について、カテゴリ主成分分析を行い、幸福や愛情のポジティブ感情と生命力やエネルギーなどの6項目で構成される「感情」カテゴリー、運、流れ・勢いや人気、勢力の影響力など5項目で構成される「勢い」カテゴリー、縁・出会いや人脈の対人関係や、アイデアや領域の知能資源など6項目で構成される「成功資源」カテゴリーという、3カテゴリーが得られた(Figure1)。「対人的定量感」同士(世界と自分の周り)の相関係数は.83であった。

それぞれの $\phi$ 係数(.38から.65)から、世界と自分の周りにおける「対人的定量感」の項目は回答が類似していると考え、該当項目を1点として合計得点を作成した。ただし、いずれの得点も半数以上が0点(全て非該当)であるため、本研究では0点か、それ以外の有無による2群に区分して分析を行った。各カテゴリー得点間の相関係数は「感情」カテゴリーと「勢い」カテゴリーが.33、

「感情」カテゴリーと「成功資源」カテゴリーが.58, 「勢い」カテゴリーと「成功資源」カテゴリーが.48であった。

**主観的幸福感得点との関係** 「対人的定量感」に関する三つの下位尺度群を独立変数, 主観的幸福感尺度及び生活満足度尺度の合計得点を従属変数として t 検定をおこなった。その結果, 主観的幸福感尺度得点において、「感情」カテゴリー有群の方が, 無群よりも得点が低いという有意な差が得られた。つまり「幸福や愛情などが定量である」と思う回答者ほど, 主観的幸福感が低いことが示された。他の項目についても, 有意ではなかったが, 共通して「対人的定量感」有群の得点が低かった (Table4)。主観的幸福感尺度と生活満足度尺度の相関係数は  $r = .72$ であった。

Table3 「対人的定量感」に関する肯定割合

		世界で定量	周囲で定量
感情カテゴリー	幸福 (幸せの量)	16.4%	11.6%
	活動のエネルギー	13.8%	8.0%
	生命力	14.0%	8.4%
	愛情	8.4%	9.0%
	喜びや快感	7.0%	5.8%
	善意や優しさ	5.2%	3.6%
勢いカテゴリー	運	18.6%	11.4%
	人気	18.0%	11.0%
	勢力	17.8%	9.6%
	異性にもてること	11.2%	8.6%
	流れ・勢い	8.0%	5.8%
	成功資源カテゴリー	チャンス	18.4%
アイデア		12.0%	7.6%
縁・出会い		11.0%	8.6%
センス・才能		11.4%	9.8%
人脈		9.4%	9.8%
得意な分野 (領域)		8.2%	8.4%
熱くなる・夢中になれること		3.4%	3.2%
やる気		4.6%	4.2%
魔力		4.4%	2.8%
生氣・気		4.2%	3.4%

**他者との相対的幸福観** 幸福や不幸に関する価値観の項目のうち, 幸福に関する他者意識の項目 (15項目) については, 因子分析 (主因子法・バリマックス回転) を行い, 「たとえ自分が失敗した場合でも, 他者に勝っている場合は不幸だとは思わない」に代表される「失敗の位置づけ」, 「たとえ自分が成功した場合でも, 他者に勝っていないと幸福とは思えない」に代表される「成功の位置づけ」, 「他人と比べて, 自分が幸福であると実感することがある」に代表される「他者との相対的幸福」, 「他人と比べて, 自分が不幸であると実感することがある」に代表される「他者との相対的不幸」の4因子が得られた。

これらの合計得点を作成し, 「対人的定量感」に関する3下位尺度群を独立変数とした t 検定を行ったところ, 「成功の位置づけ」と「他者との相対的不幸」得点については3カテゴリー全てで, 「失敗の位置づけ」と「他者との相対的幸福」得点については, 「勢い」カテゴリーのみで, 有群の方が無群よりも幸福に関して, 他者との相対的な判断をしているという有意な差が得られた (Table4)。これらの項目と, 主観的幸福感尺度と生活満足度尺度との相関係数を求めたところ, 「他者との相対的不幸」得点との関連は高かったものの, 「他者との相対的幸福」得点や「失敗の位置づけ」得点との関連性は高くなかった (Table5)。

**実感の重要性** 本調査では幸福感と不幸感に関する非対称性についても検討している。「幸福を実感すること」(4.57) は, 「不幸を実感すること」(3.72) よりも評定値が高く, また「実感がない場合に幸福である」と回答する傾向 (4.57) は, 「不幸である」と回答する傾向 (3.23) よりも高かつ

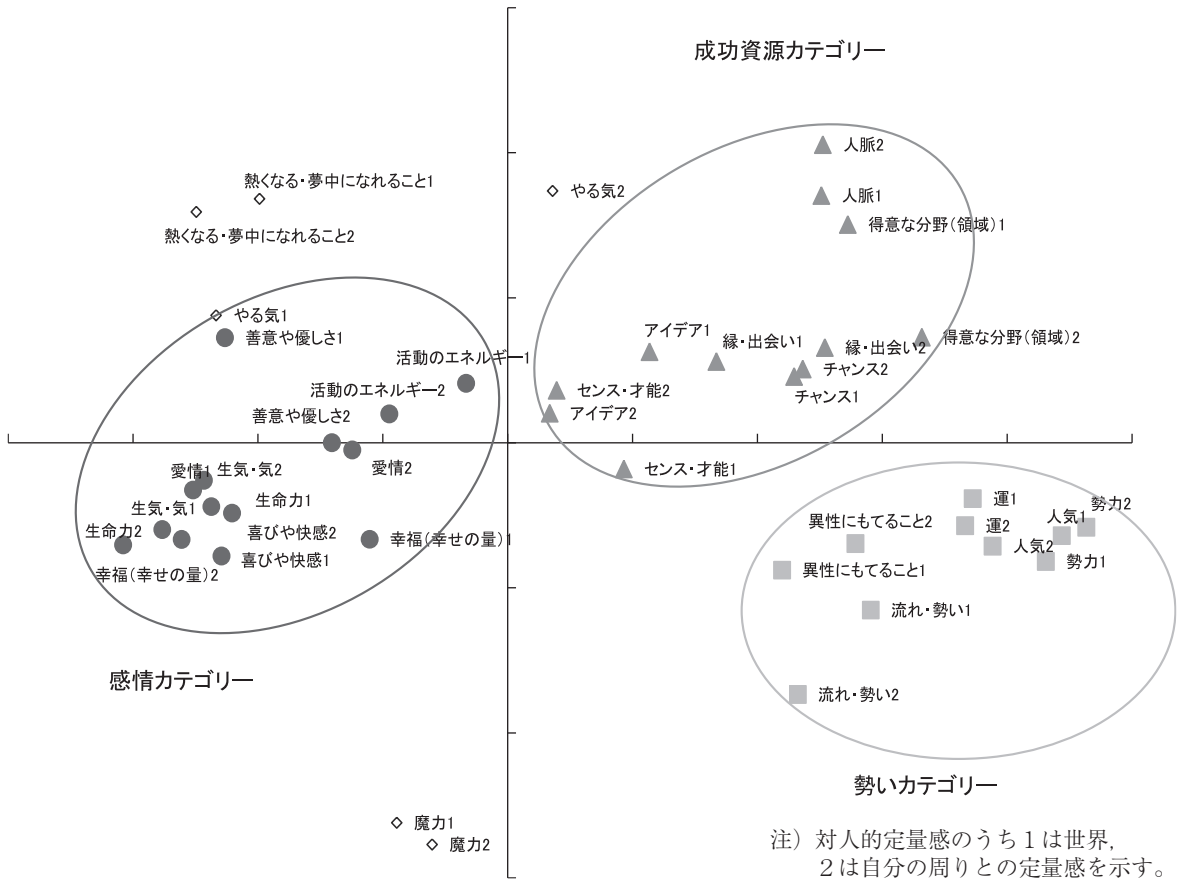


Figure 1 対人的定量感のカテゴリー

Table4 「対人的定量感」のカテゴリーと各変数との関連性 (平均値)

	「感情」カテゴリー			「勢い」カテゴリー			「成功資源」カテゴリー		
	無群	有群	t 値	無群	有群	t 値	無群	有群	t 値
主観的幸福感尺度得点	18.44	17.61	1.99*	18.44	17.82	1.55	18.38	17.85	1.33
生活満足度得点	19.71	19.13	1.11	19.84	19.15	1.36	19.81	19.14	1.33
「成功の位置づけ」得点	3.07	3.45	3.59***	3.03	3.39	3.66***	3.04	3.40	3.58***
「失敗の位置づけ」得点	3.22	3.40	1.92†	3.18	3.39	2.38*	3.21	3.37	1.78†
「他者との相対的幸福」得点	4.09	4.24	1.75†	4.03	4.26	2.64**	4.11	4.18	0.87
「他者との相対的不幸」得点	3.75	4.05	2.69*	3.63	4.09	4.19***	3.69	4.06	3.43**
「幸福を実感」	4.61	4.50	0.94	4.62	4.52	0.91	4.70	4.42	2.45*
「不幸を実感」	3.61	3.91	2.32*	3.50	3.95	3.68***	3.55	3.91	2.88**
「実感のない幸福」	4.65	4.44	1.84†	4.57	4.58	0.12	4.67	4.46	1.90†
「実感のない不幸」	3.16	3.37	1.67†	3.10	3.37	2.20*	3.12	3.37	2.10*
競争的達成動機得点	46.77	49.27	2.86**	45.25	50.16	5.99***	46.35	49.22	3.42**
現状の不正感得点	15.67	16.34	2.72**	15.52	16.32	3.40**	15.56	16.32	3.23**
因果の公平性得点	14.57	14.83	1.10	14.53	14.93	1.75†	14.32	15.09	3.39**

\*\*\*:  $p < .001$  \*\*:  $p < .01$  \*:  $p < .05$  †:  $p < .10$

Table5 相対的幸福観や実感と主観的幸福感の間の相関係数

	主観的幸福感尺度得点	生活満足度得点
「成功の位置づけ」得点	-.35	-.17
「失敗の位置づけ」得点	-.16	.02
「他者との相対的幸福」得点	.14	.18
「他者との相対的不幸」得点	-.56	-.47
「幸福を実感」	.64	.66
「不幸を実感」	-.61	-.48
「実感のない幸福」	.56	.54
「実感のない不幸」	-.60	-.44

た。このことは不幸という判断が幸福と異なり、何らかの実感を条件としているという幸福と不幸の判断の非対称性を示していると考えられる。

これらの項目についても、「対人的定量感」に関する3下位尺度群との関連を検討したところ、幸福を実感する程度は「感情」カテゴリのみで差が見られたのに対して、不幸を実感する程度は全てのカテゴリにおいて、差が見られた。また、「感情」カテゴリ以外では、不幸という実感がなくても「不幸である」と判断している割合が高いことが分かった (Table4)。これらの項目と、主観的幸福感尺度と生活満足度尺度との相関係数を求めたところ、いずれの項目も関連が高かった (Table5)。

**公正世界観との関連性** JWB 完成版尺度では、下位尺度間 (因果の公平性・現状の不正感) の相関は小さかった ( $r = -.16$ )。競争的達成動機得点と現状の不正感得点の間には、競争的達成動機が高い者ほど現状の不正感も高いというやや弱い相関が見られた ( $r = .24$ )。

「対人的定量感」の3カテゴリ得点をそれぞれ独立変数、JWB 完成版尺度得点と競争的達成動機得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、3カテゴリ全てでカテゴリ有群の方が無群よりも、現状の不正感得点と競争的達成動機得点が高いという有意な差が見られた。因果の公平性得点については、「成功資源」カテゴリで有群の方が低いという有意差が見られたが、「感情」カテゴリでは差がなく、「勢い」カテゴリでは有意な傾向にとどまった (Table4)。

回答者は収入を元に、それぞれ高中低3群に割り当てられている。そこで収入と競争的達成動機得点を独立変数として、幸福感の二つの測度 (SHS と SWLS) を従属変数とした分散分析を行ったところ、SWLS については交互作用が見られ ( $F(2, 497) = 2.82, p < .10$ )、競争的達成動機が低い群は収入と関係なく、SWLS がほぼ同じであるのに対して、高い群では収入に応じて SWLS が変化する傾向が見られた (Figure2)。

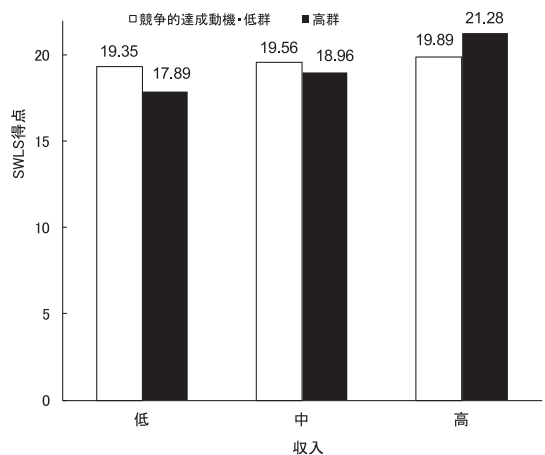


Figure2 収入と競争的達成動機が生活満足度得点 (SWLS) に及ぼす影響



## 総合論議

以上の結果は、資源の限定観のうち「対人的定量感」を持つことが主観的幸福感を低下させることを示していると考えられる。関連が見られた項目の中でも、「他者に勝っていないと幸福とは思えない」という「成功の位置づけ」や「他人と比べて、自分が不幸であると実感することがある」に代表される「他者との相対的不幸」の項目で顕著な差が見られたことから、「対人的定量感」は幸福感の認識を高める効果を持つと考えられる。これは現状に満足していない者ほど相対的な判断をしやすいうことである。

もちろん主観的幸福感が低い者が、「対人的定量感」を持つ、あるいは「対人的定量感」に原因を帰属しているという逆の因果の説明も考えられるが、資源の限定観はしろうと信念の一種であると考えられるため、状況が変化することで、その考え方自体を持たなくなるという方向性は考えにくい。

また「対人的定量感」を持つ者は競争的達成動機も高かった。競争的達成動機は単独で幸福感と関連している訳ではなく、収入という要因を加味した場合に関連が見られた。このことから、現実の成功要因の有無だけが幸福感に影響するのではなく、「対人的定量感」が競争的達成動機を高めた結果として、幸福感の変動に結び付いていると考えられる。因果の公平性については、資源の「正しい」使い方など、個人内の定量感とも関連している可能性がある。この点は検討の余地が残されていると考えられる。

本研究で注目したのは主観的幸福感が判断される背景である。不幸の程度は現状の恵まれなさが判断に直結している反面、幸福の程度の判断は多元的であることが示されたと言える。もし相対的な判断のしやすさなどが、現状の収入や地位、成功の程度などによって左右されるとすれば、絶対的な判断とは判断軸が同じとは言えないため、主観的幸福感を一次元で測定する場合には、その測定内容にも留意する必要があると言えるだろう。

### 【注】

- 1) この研究は日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）23730596）の助成を受けた。また日本心理学会第76回大会，日本社会心理学会第53回大会，日本心理学会第77回大会で発表された。

### 【引用文献】

- 1) ほおじろえいいち『幸せの進化形』KKベストセラーズ，2005
- 2) 社会全体の幸福絶対量って、一定ですか  
<http://mimizun.com/log/2ch/phil0/980162388/>（2019年7月29日）
- 3) 周りに人の運を奪う人いませんか？  
<https://komachi.yomiuri.co.jp/t/2007/1206/159260.htm>（2019年7月29日）
- 4) Suh, E. M., & Koo, J. “Comparing subjective well-being across cultures and nations: The “what” and “why” questions.” In M. Eid & R. J. Larsen (Eds.), *The science of subjective well-being*, New York: Guilford, 414-427, 2008
- 5) Krugman, P. “Lumps of Labor.”  
<https://www.nytimes.com/2003/10/07/opinion/lumps-of-labor.html?>（2019年9月29日）

- 6) 村上幸史「『運を消費する』という物語」『質的心理学研究』第5巻, 146-164頁, 2006
- 7) 村上幸史「『幸運』な事象は連続して起こるのか? —『運資源ビリーフ』の観点から—」『社会心理学研究』第25巻, 30-41頁, 2009
- 8) Kahneman, D., Krueger, A. B., Schkade, D., Norbert Schwarz, N. Stone, A. A. “Would You Be Happier If You Were Richer? A Focusing Illusion.” *Science*, 312, 1908-1910, 2006
- 9) 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文「人間関係のスタイルと幸福感: つきあいの数と質からの検討」『実験社会心理学研究』第52巻, 63-75頁, 2012
- 10) Lyubomirsky, S., & Ross, L. “Hedonic consequences of social comparison: A contrast of happy and unhappy people.” *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1141-1157, 1997
- 11) 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見陽・Sonja Lyubomirsky「日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討」『日本公衆衛生雑誌』第51巻, 845-853頁, 2004
- 12) Diener, E., Horwitz, J., & Emmons, R. A. “Happiness of the very wealthy”. *Social Indicators Research*, 16, 263-274, 1985
- 13) 大石繁宏『幸せを科学する —心理学からわかったこと』新曜社, 2009
- 14) 白井美穂「多次元的な公正世界観 (Just World Beliefs) とその測定 —尺度の妥当性と信頼性についての検討—」『日本社会心理学会第52回大会論文集』, 222頁, 2011
- 15) 堀野緑「達成動機の構成因子の分析 —達成動機概念の再検討—」『教育心理学研究』第39巻, 148-154頁, 1987